慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	仙台市民図書館蔵 『沙石集』 抜書本について：『沙石集』 諸本研究の一材料として
Sub Title	On the excerpt of "Shasekishu" in Sendai city library : for the study of text critic of "Shasekishu"
Author	上野, 陽子(Ueno, Yoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2000
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.79, (2000. 12) ,p.1- 23
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00790001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

仙台市民図書館蔵『沙石集』抜書本について

――『沙石集』諸本研究の一材料として――

上野　陽子

一　序

一二〇〇年代から一三〇〇年代にかけて生きた僧・無住は、弘安二年（一二七九）夏に『沙石集』を起稿し、弘安六年（一二八三）秋に脱稿した。起稿以前から取材していた話をふんだんに盛り込み、自分に縁のある人物や土地の話を多く語り、話好きの性格を垣間見せるほか、一人の僧として、当時の仏教界、ひいては世間へ真剣に物申している。内容は、伊勢参宮の経験を生かした神道説話に始まり、地蔵菩薩等の霊験譚、北条泰時の逸話、和歌説話、笑話、因果応報譚、遁世譚等、実に多岐に渡っている。八十七歳と長命であった無住は、五十八歳で『沙石集』を脱稿した後、『沙石集』とはまた趣を異にする『雑談集』『聖材集』等を執筆する一方で、『沙石集』にも手を加え続けた。それは語句の改変といった簡単なものにとどまらず、文章の改変、説話の改廃、巻の入れ替え等の大がかりなものであり、特に後半の巻の改編は著しい。

現在見られる『沙石集』諸本は、大きく広本・略本の二系統に分かれるのを初めとし、本によって内容・構成の相違が甚だしい。このような事態を招いた原因は、著者・無住自身による熱心な加筆・訂正作業によるところが大きい。

これらの諸本について、まず渡辺綱也氏が『沙石集』諸本を全体的に見渡すご研究をされた。[1] その後もいくつかの論考や翻刻が出されているが、多種多様な諸本を比較検討する為には、もっと資料が欲しいというのが実感である。

ところで、『沙石集』には、『金撰集』や『金玉集』等、いくつかの抜書本があることが知られている。先頃、『沙石集』の抜き書きを主な内容とした、内題も外題もなく小口に「沙石集」と横書きしてある仙台市民図書館所蔵の一冊の写本を紹介した。[2] この抜書本の特徴を生かし、原本の形態を考察することによって、『沙石集』諸本研究に多少なりとも材料を提供出来ないか試みてみたい。

二　仙台市民図書館蔵『沙石集』抜書本の特徴

原本の形態を考察する前段階として、仙台市民図書館蔵本の特徴を整理しておきたい。まず形態上のことを挙げると、内題・外題・目録・序文・跋文といった形式的なものは一切ない。話と話の間を一行分空けている箇所もあれば空けていない箇所もあり、また話と話の間を空けるぐらいなら巻と巻の間を空けても良さそうなものであるが空けていないなど、全体に統一性が見られない。抜き出す分量も巻によってばらばらである。また、書き間違えた字を上から書きつぶしているなど、雑なところが見られる。おそらく本書は、奥付に名前の見られる照寛が自分の為の手控えとして抜き出したものと推測される。

本文の上部余白には、小さな字で表題を付してある。だが、本論の末尾にある表の如く、話の変わり目となる、表題

を付してしかるべき箇所に付していないことが多々ある。一通り抜き書きした後で、どこにどの話があるか分かりにくい為か、後から表題を付したという手順が想定される。その為に書き落としが何ヶ所も出来てしまったのだろう。

本書の十一丁裏に「右ハ沙石集一二ノ巻ニ出ツ」、二十丁裏に「右沙石集ノ三四ノ取意也」、三十六丁表に「右沙石集五六ノ巻終」、五十八丁裏に「右沙石集第十取意終リ」とある。ここでも、巻七・巻八・巻九からも抜き書きをしているのにもかかわらず、何の注意書きもないことから統一性のなさを感じるのであるが、同時に二巻をひとまとめにして扱っていることより、照寛の見ていた本は、二巻ごとにまとめた十巻五冊であったことが分かる。また、六十四丁表の奥付に「于時享和二戌年二月彼岸会第一日書写之　仙府南鍛冶町　円乗坊照寛的」とあることより、照寛が享和二年（一八〇二）に現在の仙台市若林区南鍛冶町にあった円乗坊[3]で抜き書きをしていたことが分かる。

次に抜き書きされた話の配列を見ていくと、略本系統の『沙石集』の配列と寸分違わず一致している。梵舜本では、略本の巻六下が梵舜本の巻九に当たり、略本の巻七下と巻八が梵舜本の巻七に当たるなど、巻の順番が入れ替わっている。広本系統を代表する米沢本では、略本の巻六上のみが米沢本の巻六に当たり、略本の巻六下は米沢本の巻七に当たるなど、巻の切れ目が異なる。従って、「右沙石集五六ノ巻終」などの注記と一致するのは略本系統だけである。また、仙台市民図書館蔵本には広本系統にしかない話は見られないが、反対に略本系統にしか見られない話は含まれている。原本は明らかに略本系統である。なお、『金撰集』や『金玉集』は原本から順番通りに抜き書きをしたとは考えにくい配列になっているので、原本の配列に忠実に抜き書きをしている点も、仙台市民図書館蔵本のひとつの大きな特徴として挙げられよう。

次に抜き書きの仕方の特徴を挙げる。当然のことながら、一話をそのまま抜き出す、或いは抜き出さないという選択

がされている他、『沙石集』では一表題の中に複数の話が含まれている場合が多いので、その中から一部の話を抜き出す、或いは抜き出さないと言う選択もなされている。

また、特徴的な抜き書きの例としては、次のように、冒頭に「○」を付して一部を極短く抜き出すというものがある。

○光明后宮ノ内裏ノ屏風ニ書玉ヘルト也清貧ハ常ニ楽濁富ハ常憂ト

また、数行ずつ飛び飛びに抜き出すという方法の取られたものもいくつか見受けられる。他本の本文と比較すると分かりやすいので、ここでは仙台市民図書館蔵本の享和二年という新しい成立年代を考慮し、略本系統の中でも比較的刊行年が新しく、最も多く流通した貞享三年版本の本文を挙げる。貞享三年版本の傍線部は仙台市民図書館蔵本には存在していない。

慈悲ハ菩薩ノ体仏ノ心也少分ナル時ハ仁トイヽ広大ナル時ハ慈悲ト名ク此心法界ノ衆生ヲ利ス心ナラバ全ク菩薩ノ慈悲諸仏ノ心也観経ニハ仏心者大慈悲是也法花ニハ如来室ト云瑜伽論ニハ菩薩ハ何ヲ以体トスト問ハヽ慈悲ヲ以体トスト答フベシト（仙台市民図書館蔵本）

慈悲ハ菩薩ノ体仏ノ心ナリ少分ナル時ハ仁トイヒ広大ナル時ハ慈悲ト名ク譬ハ火ヲ以テ物ヲヤク火ノ体ハ同シケレ共小キ薪ヲ焼ク時ハ火ノ用少ナシ大ナル薪ニハ火ノ用ハゲシキガゴトク慈悲ノ心其境ノセバキ時ハ癡愛トモ情トモ仁トモ云ハルコノ心漸大ニシテ法界ノ衆生ヲ利スル心ナラバ全ク菩薩ノ慈悲諸仏ノ心ナリ三身仏性ノ中ノ因縁ノ種応身ノ徳トアラハル観経ニハ仏心者大慈悲心是也ト云リ法華ニハ如来室トイフハ一切衆生ノ中ノ大慈悲心是也ト云リ瑜伽論ニハ菩薩ハ何ヲ以テ体トスト問ハヾ慈悲ヲ以テ体トスト答フベシト云リ（貞享三年版本）

また、書き出さなくても話の展開に差し支えがない箇所や、話の主題からそれる部分は抜き出さないという方針がとられているものもいくつか見受けられる。例として次の話を挙げる。

伊豆ノ山ニ浄土房ト云学匠有ケリ遁世セントテ弟子ニ坊ヲ譲リテ山ノ岸ニ少キ庵室ヲ構テ後世菩提ノ行怠ラズ或時長雨振リ震動シテ山崩レテ此庵室ヲ打埋ミケリ弟子共憐レミサワギ責テカハネヲ取テ孝養セントテ土ヲ堀テ見ルニ庵室ハ砕ケテ跡方モナシ浄土房ハツヽガナシ弟子トモ余リノ事ニ嬉シ涙ニナキケリ浄土房思入レタル気色ニテ浅間敷損ヲシタルゾヤト何事ノ御損カアルヘキ御命ノヲハスルコソ悦ナレ御損トハ御庵室ノ事カ御本尊ナントノ損シテヲハスル事歟ト云ヘハ其事ニハ非ス幼少ノ時ヨリ観音ノ名号ヲ念スレハ如ㇾ此ノ災難ヲマヌカレル事ト思ヒナレタル心ニテ南無観音ト一ト声唱ヘタリケル故ト覚ユル也命ノ助リヌル同シイトマニ南無阿弥陀仏ト唱ヘテ往生スベカリケルヲ由ナク命延テ浮世ニ存シ事大キナル損ヲシタル心地スル也ト涙ヲ流シケレハ弟子トモモ哀レニ覚ヘテ共ニ涙ヲ流シケリ深ク思入テ此世ニ心ヲ止メズ浄土参リヲ急ク心ニ実トアリケルニソ浦山敷事也（仙台市民図書館蔵本）

伊豆ノ山ニ浄土房ト云学匠有ケリ時ノ二和尚ナリ一和尚ノ老僧重病ヲ受テカギリナルヨシ聞テユキテトフラヒケレバ一和尚申ケルハ法師ガ死セン事イカニウレシクオボスラントイフ思ハズニ覚テ何ゴトニカ左様ノ心候ベキトイヘバ一和尚ニ成リ給ハンズレバヨトイヒケル別当モナクテ一和尚ヲ別当ノゴトク思ヘル所ナル故ニカクイヒケルヲ聞テモトヨリ道心アル僧ニテ思ケガサレタルモ且ハヽヅカシク覚テコノ老僧ガ生ケルトキ遁世シテ見セント思テ弟子ニ房ヲ譲リテ山ノキシニ小キ庵室ヲカマヘテ後世菩提ノ行ヲコタラズアル時長雨フリ震動シテクヅレテ此庵室ヲサナガラ打ウヅミテケリ弟子共アハテサハギテ今ハイフカヒナシカハネヲトリテ孝養セントテ土ヲホリテ見ルニ庵室ハクダケテアトカタナシ浄土房ハツヽガナシ弟子共アマリノ事ニテウレシナキニゾナキハル浄土房思入レタル気色

ニテアサマシキ損ヲ取タルゾヤ御房トイヘバ何事ノ御損カアルベキ御命ノオハスルコソ悦ナレ御損トハ御庵室ノ事カ御本尊ナンドノソンシテオハスル事カトイヘバ其事ニハアラズ幼少ノトキヨリ観音ノ名号ヲ念スレバカクノゴトクノ災難マヌカルル事ト思ナレタル心ニテ南無観音ト一声トナヘタリケル故ト覚ユルイノチタススカリヌル同ジイトマニテ南無阿弥陀仏ト唱ヘテ往生スベカリツルヲ由ナク命ノヒテウキ世ニナガラヘンコトマメヤカニソンヲトリタル心地ストテナミタヲナガシケレハ弟子共モ哀ニ覚テ涙ヲナガシケリフカク思入テコノ世ニ心ヲトヾメス浄土ヘマイラントイソグ心ノマコトアリケルコソ浦山シク覚ユレ（貞享三年版本）

仙台市民図書館蔵本では、傍線を付した、伊豆の浄土房という学匠が遁世を決意した経過を描く部分がない。「伊豆ノ山ニ浄土房ト云学匠有ケリ」の次にすぐ遁世したという話が来るので唐突な印象を受けはするが、話の展開に差し支えがあるという程のことはない。それに話の主眼は、死にそうな目に遭いながらも無事に生還した浄土房がやはり南無阿弥陀仏と唱えて往生すべきであったと語るところにあるだろう。

他にも、単純な目移りにより一部が欠落したと思われる話もあるが、仙台市民図書館蔵本はこれまでに挙げたような大きく分けて五種の抜き書きの仕方を取っている。

三　仙台市民図書館蔵『沙石集』抜書本の原本の形態考察

仙台市民図書館蔵本の原本の形態を出来る限り復元し、その特徴をとらえてみたいと思う。既に述べたように、略本系統で、二巻を一冊にした欠巻のない十巻五冊のものであったことはまず間違いない。

具体的な考察に入る前に、以下に資料として仙台市民図書館蔵本と比較する本の説明を簡単にしておきたい。ここで

用いる本はいづれも略本系統のものである。まず貞享三年の版本であるが、これは先にも述べたように『沙石集』諸本の中でも最も流通した流布本である。次に岩瀬文庫本であるが、略本系統の写本の中でも新しいもので、渡辺綱也氏によると江戸末期近くの書写であり、それにもかかわらず、流布の版本を写したものではないと思われる細部の相違があると指摘されている。これらは仙台市民図書館蔵本の成立年代の新しさを考慮して資料として用いた。最後に京都大学附属図書館蔵本であるが、反対に現存する略本系統の写本の中では、長享三年（一四八九）という最古の書写年代を持つ。他の略本系統の本文が流布本に近いのに対し、全巻に渡り相違が甚だしいと言われる。(4)

まずは、次の四種の本文を比較してみたい。

中頃伊豆ノ国ノ或処ノ地頭ニ若キ男有ケリ狩シケル次ニ猿ヲ一匹生ケ取ニシテ是ヲ縛テ家ノ柱ニ結付ケルヲ彼母ノ尼公慈悲アル人ニテアライトオシ難儀ニ有ン免シテ山ヘヤレトイ、ケレトモ家来共主ノ心ヲ知テ恐テ是ヲトカズイデサラバ我トカントテ是ヲ解ユルシテ山ヘヤリケリ是ハ春ノ事ナリケルニ夏覆盆子ノ盛ニ覆盆子ヲ柏ノ葉ニ包ミ隙ヲ伺ヒ此猿尼公ノ元ヘ持来ル余リニ哀ニ思ヒ布袋ニ豆ヲ入テ猿ニヤリケリ其後栗ノ盛ニ先ノ布ノ袋ヘ栗ヲ入テ隙ニ又持来ル此度ハ猿ヲトラヘ置テ子息ヲ呼テ此次第ヲ語テ子々孫々迄モ此処ニ猿ヲバ殺サシメジトテ起請ヲ書ケ若シサラズハ母子ノ義アルヘカラズトイ、ケレハ子息起請ヲ書ニ当時迄モ此処デハ猿ヲ殺サズト也恩ヲ知ラザル者ハ畜類ニモ劣レリ近代ハ父母ニ手向ヒ師匠ヲコロシ悲敷濁世ノ有様ナリ（仙台市民図書館蔵本）

中比伊豆ノ国ノ或所ノ地頭ニ若キ男アリケリ狩シケルツイデニ猿ヲ一匹イケトリニシテ是ヲシバリテ家ノ柱ニ結付タリケルヲ彼母ノ尼公慈悲アル人ニテアライトオシイカニワビシカル覧アレトキユルシテ山ヘヤレト云ヘドモ郎等冠者原主ノ心ヲ知テ恐レテ是ヲトカズイデサラバ我トカントテ是ヲトキユルシテ山ヘヤリヌ是ハ春ノ事ナリケルニ夏覆

盆子ノサカリニ覆盆子ヲ柏ノ葉ニツヽミテ隙ヲ伺ヒテ此猿尼公ニワタシケリアマリニアハレニイトオシク思ヒテ布ノ袋ニ大豆ヲ入テ猿ニトラセツ其後栗ノサカリニサキノ布ノ袋ニ栗ヲ入テ隙ニ又持テ来ル此度ハ猿ヲトラヘテヲキテ子息ヲヨビテ此次第ヲカタリテ子々孫々マデモ此所ニ猿コロサシメシト起請ヲカケモシサラズハ母子ノ儀アルベカラズトイヒタヾシク誓状シケレバ子息起請カキテ当時マデモ此所ニサルヲコロサヌヨシ或人カタリキ所ノ名マデハカヽズマシテ人トシテ恩ヲシラザランハゲニ畜類ニモ猶オトレリ近代ハ父母ヲコロシ師匠ヲコロス者聞ヘ侍リカナシキ濁世ノ習ナルベシ（貞享三年版本）

中比伊豆国ノ或所ノ地頭ニ若男アリケリ狩シケルツイテニ猿ヲ一疋イケドリニシテ是ヲ縛テ家ノ柱ニ結付タリケルヲ彼母ノ尼公慈悲アル人ニテアライトオシイカニワビシカル覧アレトキユルシテ山ヘヤレトイヘトモ郎等冠者原主ノ心ヲ知テオソレテ是ヲトカスイデサラハ我トカントテ是ヲトキユルシテ山ヘヤリヌ是ハ春ノ事ナリケルニ夏覆盆子ノサカリ覆盆子ヲ柏ノ葉ニツヽミテヒマヲ伺ヒテ此猿尼公ニワタシケリアマリニアハレニイトオシク思ヒテ布ノ袋ニ大豆ヲ入テ猿ニトラセツ其後栗ノサカリニサキノ布ノ袋ニ栗ヲ入テヒマニ又持チ来ル此タヒハサルヲトラヘテヲキテ子息ヲヨビテ此次第ヲカタリテ子々孫々マテモ此所ニ猿コロサシメジト起請ヲカケモシサラスハ母子ノ儀アルヘカラストオビタヽシク誓状シケレハ子息起請カキテ当時マテモ此所ニ猿ヲコロサヌヨシ或人カタリキ所ノ名マテハカヽズマシテ人トシテ恩ヲシラザランハゲニ畜類ニモ猶オトレリ近代ハ父母ヲコロシ師匠ヲコロス物聞ヘ侍リカナシキ濁世ノナラヒナルベシ（岩瀬文庫本）

中比伊豆ノ国ノ或ル所ノ地頭ニ若キ男有リケリ狩シケル次テニ猿ヲ一疋イケドリニシテ是レヲシハリテ家ノ柱ニユイツケタリケルヲ彼ノ母ノ尼公慈悲有ル人ニテアライトヲシ何カニワビシカルラントテアレトキ許シテ山ヘヤレト

云ヘトモ郎等冠者原主ノ心ヲ知テ恐テ是ヲトカズイデサラハ我レトカントテ是ヲトキ許シテ山ヘヤリヌ是ハ春ノ事也ケルニ夏覆盆子ノサカリニイチコヲ柏ノ葉ニツヽミテヒマヲ伺ヒテ此ノ猿尼公ニワタシケリアマリニ哀ニ糸惜ク思テ布袋ニ大豆ヲ入テ猿ニトラセツ其後チ栗ノサカリニ先ノ布袋ニ栗ヲ入テヒマニ又持テ来ル此ノ度ハ猿ヲトヽメテヲキテ子息ヲ呼テ此ノ次第ヲカタリテ子々孫々マテモ猿殺サジト起請ヲカケ若シサラズハ母子ル此タヒハサルヲトラヘテヲキテ子息ヲヨヒテ此ノ次第ヲカタリテ子々孫々マテモ猿殺サジト起請ヲカケ若シサラズハ母子ノ儀有ルヘカラズトヲビタヽシク誓状シケレハ子息起請カキテ当時マテモ彼ノ所ニ猿ヲ殺サヌ由シ或人カタリ申キ所ノ名マテハ承ラスマシテ人トシテ恩ヲ知ラザランハゲニ畜類ニモ猶ヲトレリ近代ハ父母ヲ殺シ師匠ヲ殺ス物聞ヘ侍リ悲キ濁世ノナラヒナルヘシ（京都大学附属図書館蔵本）

一見して分かることだが、話の骨格はどの本文でも変わらないものの、仙台市民図書館蔵本と貞享三年版本・岩瀬文庫本・京都大学附属図書館蔵本とを比較すると、明らかに仙台市民図書館蔵本と他三種の本文との相違が目立つ。これはこの話に限らず、仙台市民図書館蔵本に収録されている話全般に渡って見られる傾向である。また、従来他の略本と比較すると全巻に渡って相違が目立つと言われていた京都大学附属図書館蔵本も、仙台市民図書館蔵本と比較した場合には、その本文はむしろ他の略本系統の本文に近いと言える。次に、また四種の本文を比較したい。

昔漢土ニ国王有テ天下ノ智者ヲ試ントテ百人ノ高僧ヲ内裏ヘ請シテ武士ヲ数百騎隠シ置テ百僧ヲ俄ニ殺害スヘキ体ニカコミケレハ皆アハテサワギテ四方ヘ逃去ルニ一人ノ僧少モサハガスシテ儼然トシテ座ス事ノ色バカリニテヤミヌ王此僧ニ問玉フハ余ノ僧ハ皆恐レサル和尚一人何ゾ恐レザルト僧ノ曰生レルヨリ念々ニ死ス何ゾ始テ驚ント爰ニ王此僧ハ智者也トテ崇テ国師トセラレケリ生ノ始ヨリ死ノ来ル事ヲ知ラス何ゾ敢テ無常ノ死ヲ恐レザラン（仙台市

民図書館蔵本）

昔漢土ニ国王アリテ天下ノ智者ヲ試ミントテ百人ノ高僧ヲ内裏ヘ請シテ武士ヲ数百騎カクシヲキテ百僧ヲ俄ニ殺害スヘキ体ニテカコミケレハ皆アハテサワギテ四方ヘニゲサルニ一人ノ僧少モサワガズシテ儼然トシテ坐スサテ事ノ色計ニテヤミヌ王此僧ニ問ハク余ノ僧ミナ恐レ去ル和尚一人何ゾ恐レサルト僧ノイハク生ル、ヨリ念々ニ死ス何ゾ始テヲドロカント爰ニ王此僧ヲ智者也トテアガメテ国師トセラレケリ我等ガ無始ノ妄想顚倒ノ愚ナル心ニハ此身モ依報ノ山河大地屋宅什物モ昔ノ物カワラメト思ヘドモ刹那々々ニ生滅シテ先ノ物ハ滅シテ新シク生ズルナリ業因縁ニヨリテ相続シテ有ベキ程アリテツクベキ時ハ尽ルナリ油ノアルホド灯ハアレドモ刹那々々ニ火消テアブラノ力ニテ又生シ又生シツクナリ水ノ流モ同シ有ニ似タレトモ本ノ水ハ暫モトヾマラザルガ如シサレバ孔子ノ言ニモ我終日スニ臂ヲ交タルホト顔回ガ新ナル身ヲ見ルト云ナリ古人云紅顔自在二童子ノ時一白髪今在二老体ノ身一云テ若キ時ノ色形ハ其ノ時失ヌ老体ノ身ハ今新タニヱタリ（貞享三年刊本）

昔シ漢土ニ国王アテ天下ノ智者ヲ試ミントテ百人ノ高僧ヲ内裏エ請シテ武士ヲ数百騎カクシヲキテ百僧ヲ俄ニ殺害スヘキ体ニテカコミケレハミナアワテサワキテ四方ヘニケサルニ一人ノ僧少モサワカスシテ儼然トシテ坐スサテ事ノ色計ニテヤミヌ王此僧ニ問ハク余ノ僧ミナ恐レ去ル和尚一人何ソ恐レサルト僧ノ云ク生ル、ヨリ念々ニ死ス何ソ始テヲトロカント爰ニ王此僧ヲ智者也トテアカメテ国師トセラレケリ我等カ無始ノ妄想顚倒ノ愚ナル心ニハ此身モ依報ノ山河大地屋宅什物モ昔ノ物カワラヌト思ヘトモ刹那々々ニ生滅シテ先ノ物ハ滅シテ新シク生スル也業因縁ニヨリテ相続シテ有ヘキ程アリテツクヘキ時ハ尽ルナリ油ノアルホト灯ハアレトモ刹那々々ニ火消テ油ノ力ニテ又生シ又生シツグナリ水ノ流モ同シ有ニ似タレトモ本ノ水ハ暫モト、マラサルカ如シサレハ孔子ノ言ニモ我終日スニ

交二タルホト臂ヲ一見ルニト顔回カ新ナルヲ一云フ心ハ念々ニ先ノ身ハ滅スル故ニ顔回カ新ナル身ヲ見ルト云ナリ古人云紅顔ハ自ラ在リ二童子ノ時一ニ白髪ハ今在リ二老体ノ身一ニ云テ若キ時ノ色形ハ其ノ時失ヌ老体ノ身ハ今新タニエタリ（岩瀬文庫本）

昔シ漢土ニ国王アリテ天下ノ智者ヲ試ミントテ百人ノ高僧ヲ内裏ヘ請シテ武士ヲ数百騎カクシヲキテ百僧ヲ俄ニ殺害スヘキ体ニテカコミケレハ皆ナアハテサワキテ四方ヘニケサルニ一人ノ僧スコシモサワカスシテ儼然トシテ坐スサテ事ノ色計リニテヤミヌ王此ノ僧ニ問給ハク余ノ僧ハ皆ナ恐レ去ルニ和尚一人何ソ不レ恐ルト僧ノ云ク生ルヽヨリ念々ニ死ス何ソ初テ驚カントコヽニ王此ノ僧ヲ智者也トテアガメテ国師トセラレケリ我等カ無始ノ妄想顛倒ノ愚ナル縁ニヨリテ相続シテ可キ有ル程有テ可キ尽ク時ハ尽ル也油ノ有ル程灯ハ有レトモ刹那々々ニ火キエテ油ノ力ニテ又生々ツク也水ノ流レモ同シ有ルニ似タレトモ暫モトヽマラザルカ如シサレハ孔子ノ言ニモ我レ終日ニ交レテ臂ヲ見ルト顔回カ新タナルヲ一云リ心ハ念々ニ先ノ身ハ滅スル故ニ顔回カ新タナル身ヲ見ト云也古人ノ云ク紅顔ハ自有リ童子ノ時一ニ白髪ハ今有リ老体ノ身一ニ云トテ若キ時ノ色形ハ其ノ時失ヌ老体ノ身ハ今アラタニ得タリ（京都大学附属図書館蔵本）

出だしの部分は、微細な用語の違いを除けば特に目立った本文上の相違はない。だが、傍線を引いた仙台市民図書館蔵本の本文「生ノ始ヨリ死ノ来ル事ヲ知ラス何ゾ敢テ無常ノ死ヲ恐レザラン」は他三種の本文には見られず、同じ箇所にはもっと長い別の文がある。

それでは、このような仙台市民図書館蔵本と他の本文を比較した際の相違点は、仙台市民図書館蔵本の原本において既に発生していたことなのか、あるいは、仙台市民図書館蔵本を記した照寛が抜き書きをした際に起こしてしまったことなのかという点が非常に大きな問題となってくる。

この問題を解く手がかりになる本文が仙台市民図書館蔵本の中に見られる。

大論ニ曰臨終ノ一念ハ百念ノ業ニスクレタリトイヘリ阿耆陀王ト云シ国王ハ善人ニテ在シケルカ臨終ノ時看病ノ者扇ヲ顔ニ落シケルヲ瞋恚ヲ発シテ死シテ大蛇ニ生レテ迦旃延ニ逢テ此由ヲ語リケリ一生五戒ヲ持セル優婆塞臨終ニ妻ヲ憐ム愛習在ケルガ妻カ鼻ノ中ノ虫ニ生レタリ又一生ノ悪人モ臨終ニ□□□ニ逢テ勇猛ニ念仏シテ往生スル事観経下品下生ノ如シ此故ニ臨終正念ヲ祈ル事也

三行目に「□□□」とある。他の諸本によるとここには「善知識」という言葉が入るはずであるが、何らかの理由で読めなかったらしい。読めた時点で後から書き加えるつもりだったのか、せめてここに三文字の言葉が入ることを示したかったのか、どうしてもこの三文字を読み解くことの出来なかった照寛の苦心の跡が伺える。また、次の三例も同様の例である。

① 又古へ性蓮坊ト云上人母ノ骨ヲ以テ高野へ収メニ参ケル序ニ人皆此事ヲ知テ宿カス者ナシ（後略）

② 武州ニユタカナル地頭アリ前世ノ因縁ニヤ福徳ノアルウヘ慈悲深ク芳心アル人也近処ノ地頭不如意ニシテ所領年々ニウリケルヲ度々ニ皆買トリケリ扨彼地頭次第ニ衰ヘ終ニ身マカリケリ唯一リ有ケル地頭息子財宝モ処領モナケレハ譲ル者モナクマドヒ者ニナリ一門広キ者ナレハ爰彼コアルキテ命ヲツナギケリ（後略）

③ 下総国ニ或者ノ妻十二三計ナル継女ヲ大ナル沼ノ辺リヘ具シテ往テ此沼ノ主ニ申此女ヲ参セテ聟ニシ参ラセント度々云ケリ或時世間スサマジク風吹空曇レル時又例ノ様ニ云ケリ此娘珠ニ恐敷身ノ毛モ弥立ツ沼ノ水浪立風アラクシテ見ヘケレハ急キ家ヘ帰ルニ物ノ追心地シケレハ急キ家ヘ帰ル怖ナント云計ナシ（後略）

これらの三例は、照寛が初めに抜き書きをした段階では読めなかったので、とりあえず「□」で読めなかった字のスペースをとっておき、読めた時点で書き加えたものだと考えられる。以上の例によると、照寛は抜き書きという行為を行

ってはいるが、その際には原本から忠実に書き抜こうとしていた姿勢が伺える。

また、次の話は注目に値する。

鎌倉ニ或武士二人地蔵ヲ信シテ倶ニ崇メ供養シケリ一人ハ貧シカリケレハ古キ地蔵ノ相好モヨゴレタルヲ花香ヲサヽゲ尊ビケリ一人ハ世間ユタカナリシユヘ新敷造立シテ厨子ナンド美麗ニシタテ、崇メ供養シケリ此人先ノ地蔵ハ貧シキ時求メタレバトテ傍ニ打置テ供養モセザリケル時夢ニ此地蔵物怨ミタル気色ニテ世を救ふ心は我もあるものを仮りの姿はさもあらばあれとカク詠ジ玉フト見テ驚キ一ツノ厨子ヲ安置シ同様ニ貴ヒケリト也（仙台市民図書館蔵本）

鎌倉ニ或武士二人知音也ケルガ地蔵ヲ信シテ倶ニアガメ供養シケリ一人ハ世間貧シカリケレバフルキ地蔵ノ相好モト、ノヲラヌヲ花香奉テアガメケル一人ハ世間ユタカナリケレバイミシク造立シテ厨子ナンド美麗ニシタテ、アガメ供養シケリ此人サキダチテ世ヲハヤクシケル時マヅシキ知音ニ地蔵ヲ信ズル人ナレバトテ本尊ヲユツリケリ悦テ今ノ本尊ヲアガメ供養シテ年コロノフル地蔵ヲバカタハラニウチヲキテ供養モセザリケリ或時夢ニ此地蔵物ウラミタル気色ニテ

世ヲスクフ心ハ我モ有ルモノヲカリノスガタハサモアラバアレ

カクウチナガメ給ト見テオトロキサワギテ一ツ厨子ニ安置シテ同ク供養ヲノベケルトゾ（貞享三年版本）

鎌倉ニ或武士二人知音アリケルカ地蔵ノ相好モ調ラヌヲ華香ヲ備テ崇メケル一人ハ世間ユタカナリケレハイミシク造立シテ厨子ナント美麗ニシテ崇メ供養シケリ此人先立テ世ヲ早クシケル時貧キ知音ニ地蔵ヲ信スル人ナレハトテ本尊ヲユツリテケリ悦テ今ノ本尊ヲ崇メ供養シテ年来ノ古キ地蔵ヲハ傍ニ打置テ供養モセサリケリ或時夢ニ此地蔵

物ウラミタル気色ニテ世ヲスクフ心ハ我モアルモノヲカリノスカタハサモアラハアレカク打詠玉フト見テ驚テ厨子ニ安置シテ同ク供養ヲノヘケルトソ（岩瀬文庫本）

鎌倉ニ有ル武士二人知音ナリケリ地蔵ヲ信シテトモニアカメ供養シケリ一人ハ世間貧カリケレハ古キ地蔵ノ相好モ調ヲラヌヲゾ花香供シ奉テアカメケル一人ハ世間ユタカナリケレハイミシク造立シテ厨子ナント美麗ニシタテ、アカメ供養シケリ此人先立テ世ヲ早シケル時貧キ知音ニ地蔵ヲ信スル人ナレハトテ本尊ヲ譲ケリ悦テ今ノ本尊ヲアカメ供養シテ年比ノ古地蔵ヲハカタワラニ打置テ供養モセサリケリ有ル時夢ニ此地蔵ノ物ウラミタル気色ニテ

世ヲスクウ心ハ我モアル物ヲカリノ姿ハサモアラハアレ

カク打詠給ト見テ驚キサハキ一ノ厨子ニ安置シテ同ク供養ヲノヘケルトソ（京都大学附属図書館蔵本）

この話については、鎌倉に地蔵を信じる武士が二人居て、一人は貧しいので古く汚れた地蔵を供養しており、もう一人は裕福なので立派な地蔵を供養していたというところまでは諸本を通じて同じ内容であり、結末も古い地蔵が供養をしなくなった武士を歌によって諌めるという同じ内容であるが、その間の展開が仙台市民図書館蔵本とその他の諸本とでは異なる。その他の諸本では、裕福な武士が亡くなる時に自分の地蔵を貧しい武士に託したところ、貧しい武士はもともと持っていた地蔵には見向きもしなくなり、貰った地蔵の供養ばかりをしていたという内容になる。だが、仙台市民図書館蔵本では、貧しい武士は最初に登場しただけで話の展開には全く関知せず、豊かな武士が貧しかった時に手に入れた地蔵の供養をしなくなっていたという内容として読めてしまう。仙台市民図書館蔵本には傍線を付した「貧キ知音ニ地蔵ヲ信スル人ナレハトテ本尊ヲ譲ケリ悦テ今ノ本尊ヲアカメ供養シテ」という部分がないので、脱文によって話の内容が変わってしまったと見ることも出来そうであるが、それだけでは、仙台市民図書館蔵本の「先ノ地蔵ハ貧シキ時

求メタレバトテ」という文と、その他の諸本の「先立テ世ヲ早シケル時」という文の相違は説明出来ない。また、次の話も注目に値する。

源信和尚往生ノ事心元ナク思テ辻占ヲ問ントテ四ツ塚ノ辺ニテ少シ高キ処ニ立テ居玉ヘハ雨振リ道悪敷ニ老翁ノ薪木ヲ取テ来ルアリ彼レニ往生スヘキヤト尋ネ玉フニ我ハ知ラズト云又明日モ雨振ルヘシト云僧都是ヲ聞テ汝ハ龍神ニ近付アルヤト問玉フニサレハ愛宕ト高尾ノ峯ヘ雲掛レハ決定振ル事ヲタメシ雲ナケレハ晴天トタメシ置也ト答ヘケリ僧都是ヲ聞テ然ハ往生モ決定ト思ヘハ決定不定ト思ヘハ不定ナルヘシト思テ疑心晴玉ヒ往生要集ヲ選テ唐朝迄名ヲ弘メ目出度往生遂ケリ（仙台市民図書館蔵本）

恵心ノ僧都モ往生ノ事心モトナク覚テ道占ナハントテ作道四塚ノ辺ニテ少シ高キ所ニ立テ見給ヘハ雨フリ道アシキニ老翁ノスベリ〳〵アユミキテ僧都ノ立給ヘル所ニテハヤ極楽ヘ参リタリト云ケルサテコソ往生ハサリトモトタノモシク思ハレケレ往生要集選シテ唐朝マテ名ヲホドコシ目出キ往生人ナリ（貞享三年版本）

恵心ノ僧都モ往生ノ事心モトナク覚テ道占トハントテ作道四塚ノ辺ニテスコシ高キ所ニ立テ見給ヘハ雨フリ道アシキニ老翁ノスベリ〳〵アユミキテ僧都ノ立給ヘル所ニテハヤ極楽ヘマイリタリト云ケルサテコソ往生ハサリトモトタノモシク思ハレケレ往生要集選シテ唐朝マテ名ヲホトコシ目出キ往生人也（岩瀬文庫本）

恵心ノ僧都モ往生ノ事不審ニ覚ヘテ道占問ントテ作道四塚辺ニスコシ高キ所ニ立テ見ラレケルニ雨フリ路アシキニ老翁ノスベリ〳〵歩ミキテ僧都ノ立給ヘル所ニテハヤ極楽ヘ参リタリト云ケレハ往生タノモシク思ハレケリ往生要集ヲ選シテ唐土マテ名ヲ施シ目出キ往生人也（京都大学附属図書館蔵本）

この話は、源信が往生のことを心許なく思って辻占をし、その結果『往生要集』を著すという『往生要集』執筆の動機

を語る内容であるが、一読して分かるように、辻占の過程が仙台市民図書館蔵本とその他の諸本とでは大きく異なる。抜書本である仙台市民図書館蔵本の内容が短く簡単なものになっているのならばともかく、反対に話の内容が倍以上に膨れ上がった複雑なものとなっている。

つまり、仙台市民図書館蔵本を他の『沙石集』略本系諸本と比較した際に見られる語句の相違、独自本文などは、照寛の責任によるところではなく、照寛の見ていた原本によるものと考えられる。照寛の生きていた時代は既に版本が流通していた時代であるが、照寛が目にしていたのは版本ではない。これまでに知られている数種の写本とも異なる。現在のところ知られていない、略本系の中でも独自の本文の目立つ写本が、享和二年に現在の仙台市若林区南鍛冶町にあった円乗坊に存在しており、照寛が手にしていたのだ。

仙台市民図書館蔵本は、享和二年という新しい成立年代故に軽視出来るものではなく、抜き書きということで約十分の一の分量しか残されていないのが残念ではあるが、その原本の本文を想定することにより、『沙石集』諸本研究の中へ新たな一材料を提供出来るのではないか。

注

(1) 渡辺綱也氏『広本　沙石集』「諸本解題」日本書房　一九四三年
日本古典文学大系『沙石集』「諸本」岩波書店　一九六六年

(2) 上野陽子「仙台市民図書館蔵『沙石集』抜書本　翻刻・上」『三田国文』三十号　一九九九年九月
「仙台市民図書館蔵『沙石集』抜書本　翻刻・下」『三田国文』三十一号　二〇〇〇年三月
書誌については『三田国文』三十号に記したので参照されたい。

（3）仙台市民図書館郷土資料室からのご教授によると、円乗坊とは里修験を行う者達が集まっていたお堂の名である。

（4）注（1）の渡辺綱也氏の解説参照

翻刻・紹介を御許可下さいました仙台市民図書館に改めて御礼申し上げるとともに、翻刻を資料として用いることを御許可下さいました京都大学附属図書館・岩瀬文庫に御礼申し上げます。貞享三年版本は慶應義塾大学図書館所蔵のものを使用させて頂きました。なお、翻刻に際し、旧字体・異体字等は通行の書体に改めています。

仙台市民図書館蔵『沙石集』抜書本の構成と流布本（貞享三年版本）との表題比較

※通し番号は私に付す／「巻・話数」は版本の巻・話数を指す

	仙台市民図書館蔵本の題	巻・話数		版本の題
001	和光ノ事	一	三	出離神明祈事
002	神明ハ慈悲ヲ貴玉フ事	一	四	神明慈悲貴給事
003	神ハ菩提心ヲ発スヲ喜玉フ事			
004		一	七	神明道心貴給事
005	因果ハ難遁事			
006	生類ヲ神明ニ供スル不審ノ事	一	八	生類神明供不審事
007	○	一	九	依和光之方便止妄念事
008	○	一	一〇	浄土門之人軽神明蒙罰事
009	信ノ事	二	一	仏舎利感得人事
010	アミタ如来御身替ノ事	二	三	阿弥陀利益事

011	観音利生ノ事	二	四	依薬師観音利益命全事
012		二	六	地蔵菩薩種々利益事
013	○	二	八	弥勒行者事
014	光明真言ノ事			
015	仏法ノ結縁不空ル事	二	一〇	仏法之結縁不空事
016	末法ノ僧ヲ敬フ事			
017	○ 頭陀ノ事	三	一	癲狂人之利口事
018	○	三	二	忠言有感事
019	物カクス因縁			
020	○			
021	厳融妹ト問答ノ事	三	三	厳融房與妹女房問答事
022	末代僧ノ悪敷事			
023	身ヲヲヒテ他ノ沙汰ヲスル事	三	四	禅師之問答是非事
024	孝子ノ事	三	六	小児之忠言事
025	孝子ノ事			
026	孝子ノ事			
027	孝道事			
028	孔子身ヲ忘ル、事ヲタトフ	三	七	孔子之物語事
029	五定ノ事			
030	孝経ノ教			

031	末代ノ遁世ノ事	三	八	栂尾上人物語事
032	○	四	一	無言上人事
033	法花念仏ヲ誹ル誤ノ事			
034	妻帯ノ事	四	二	上人之妻後事
035	妻帯ノ事	四	三	上人之子持事
036	臨終ニ女障トナル事	四	五	妻之臨終障事
037	臨終摩障ノ事			
038		四	六	頴縊上人事
039	○	四	八	道人可捨執着事
040		五	一	圓頓之学者免鬼病事
041	○	五	三	学匠之生畜類事
042	慈悲ノ事	五	四	慈心有者免鬼病事
043	智者ヲコヽロミル事	五	五	学匠之怨解事
044	無常ノ事			
045	歌ノ徳	五	一一	学匠之歌好事
046		五	一三	神明歌感人助給事
047		五	一四	人之感有和歌事
048		五	一七	有心之歌事

049		五	一八	哀傷之歌事
050		五	二〇	行基菩薩之歌事
051	人感ノ歌	五	二一	人之感有歌事
052		五	二二	連歌事
053	盗発起スル事	六		説経師之強盗令発心事
054	玄奘渡天ノ事		一	
055	○	六	七	有所得之説法事
056	袈裟ノ功徳事	六	八	袈裟ノ徳ノ事
057	樹神タ、ル事			
058	正直ノ事	六	一〇	正直之俗士事
059	行者果報ニ引ベシ	六	一二	芳心有人事
060	母ニ孝ノ事	六	一四	母之為忠孝有人事
061	盲母ヲ養童事	六	一五	盲目之母養事
062	僧殺生シテ母孝ノ事			
063	母愚痴ニ依テ馬ニ生ル、事	六	一七	祈誓母之生所知事
064	親ノ肉ヲ食フ事			
065	○ 野干法ヲ悦事僧ヲ軽ル事	六	一九	師礼有事
066	慈悲方便ノ説	七	一	眠正信房事
067	○			

068	年ヲ隠ス上人ノ事	七	三	老僧之年隠事
069	無常ヲ惜ル事			
070	一旦ノ利ヲ見テ後ヲ弁ヘザル事	七	五	齒取事
071	物ヲ乞事			
072	貞女ノ事	七	六	無嫉妬之心人事
073				
074	愛執ニテ蛇トナル事	七	七	依愛執成蛇事
075	ケヘ母蛇欲ニ逢事	七	八	継女蛇欲合事
076	蛇ノ人ノ妻ヲ犯ス事	七	九	蛇之人之妻犯事
077	蛇ヲ害シ頓死スル事	七	一〇	蛇害頓死事
078	嫉妬ニテ人ヲ害シ報ノ事	七	一一	嫉妬之故損人酬事
079	人ヲ殺シ報ノ事	七	一二	人殺害酬事
080	殺生シテ地獄ノ苦ヲウクル事			
081	僻事ハ即報フ事	七	一三	僻事即酬事
082	前業ノ報事	七	一四	前業酬事
083	因果定リアル事			
084	人ノ食ニ定リアル事			
085	慳貪ノ僧ノ事	七	一六	慳貪者事
086				
087	慳貪ノ僧ノ事			

088	鷹狩スル報ノ事	八	一	鷹狩者酬事
089	鶏卵ヲ殺シ報事	八	二	鶏子殺酬事
090	鴛ノ夢ニ見ヘル事	八	三	鴛之夢見事
091	孕鹿ヲ害シ出家スル事			
092	蟹娘ノ恩ヲ報スル事	八	四	畜生之霊事
093	亀恩ヲカヘス事			
094	燕雀ノ嫉妬ノ事			
095	猿恩ヲ報スル事	八	五	鳥獣恩知事
096	経ヲ焼テ目ツブレル事	八	六	経焼目失事
097	自カ回向ノセマキ事	八	八	廻向之心狭事
098	因果ノ事善悪不離ノ事	八	一六	先世房事
099	○			
100	遁世ノ僧ノ事	九	一	浄土房之遁世事
101	安心ヲ人ニ問事			
102	○			
103	○			
104		九	二	吉野之執行遁世事
105				
106	清キ遁世ノ人ノ事	九	三	俗士之遁世門事

107	強盗法師ノ道心ノ事	九	四	強盗法師之道心有事
108	○			
109	悪縁ニ逢テ出家スル事	九	五	値悪縁発心事
110	正月祝ノ事	九	七	迎講事
111	○	九	八	依妄執魔道落人事
112	○	九	九	霊之託仏法物語事
113	仁恵ナキ国王ノ事			
114	迷ノ事	一〇	一	得仏教之宗旨人事
115	○	一〇	二	臨終目出度僧事
116				